



島田徳重

新潟県南魚沼市

1950年新潟県生まれ。長野県の八ヶ岳経営伝習中央農場（現在の八ヶ岳中央農業実践大学校）を卒業後、就農。現在、営面積約10haでコメを栽培。このほかに4haでの作業受託、20aでスイカを栽培。現在、新潟県指導農業士、宇津野新田稲作生産組合長を務める。20年前から南魚沼市立大巻小学校で、「食育ボランティア」として子供たちにコメ作りを指導している。年間売り上げは約1500万円。労働力は本人と奥さんの由美子さん、長男の徳敏さんとその奥さん亜希さんの4人。スイカは徳敏さんが担当している。

魚沼コシヒカリ発祥の地でコメを作り続けて30年。その島田徳重さんは品目横断的経営安定対策に伴う集落組織化の動きと、自らの経営をどうバランスをとるか葛藤している。だが、「島田さんのコメが食べたい」という顧客の声が島田さんの背中を押そうとしてくれている。政策がどうあれ今までどおりのスタンスで集落と向き合い、自分なりの経営を続けようとしている。

これまで数多くの生産者に出会ったが、「大統領」に出会ったのは初めてだ。島田徳重さん。コシヒカリ共和国の4代目大統領を務めたという。

コシヒカリ共和国とは、JA六日町（現在は合併してJA魚沼みなみ）の青年部のOBが、「コメ余りの時代を生き抜くために、生産者自らが生産から販売まで携わる組織をつくらう」と1989年に建国したもの。もともと共和国といってもバーチャル国家。このころ、地域の特長を生かして活性化を図ろうと、各地に共和国が誕生した時期でもあった。

「事務局はJA内に置いたけど、宣伝・PRは自分たちでやることにした。オレが大統領だった96年〜2000年にも東京の池袋や新宿に出て行つては、試食販売イベントをどんどんやりましたよ」と島田さん。

活動の様子は、マスコミでも数多く取り上げられただけでなく、日本海を隔てて韓国まで伝わり、韓国農

協中央会の会長も島田さん宅を訪れたという。

島田さんが生産するコメは地代分を除いて約400俵。そのうち100俵はコシヒカリ共和国のコメとして販売される。これらは有機米あるいは特別栽培米で、JAを通じて一般の消費者に売られている。残りの300俵のうち、半分は個人客や地元の飲食店に直売、残りは埼玉県の米穀店、地元の業者に納めており、販路は安定している。

国から言われる前から向き合ってきた「集落」がある

そんな島田さんが今悩みを抱えている。悩みのタネは、07年度から始まる品目横断的経営安定対策に伴う集落組織づくりである。

島田さんの住む集落、宇津野新田は約50戸の農家で成り立っている。日本一のコメどころとも言われる魚沼ではあるが、ご多分漏れず高齢化



▲八海山を頂く豪雪地帯として知られる魚沼地区。越後山脈をつたって流れ出る清流は魚野川にそそぐ。恵まれた水源と日照差を利用して食味の高い魚沼コシヒカリができると言われている。



▲1954年、宇津野新田にてコシヒカリの原種決定現地試験が行われ、後に全国一高い評価を受ける魚沼コシヒカリが誕生した。先人たちの偉業を称えようと集落区民一同で、98年に石碑を建てた。「魚沼コシヒカリ発祥之地」と書かれている。

新・農業経営者ルポ／第24回

ずっと向き合ってきた「集落」と これからも付き合っていく

は進んでいる。集落で2番目に広い耕作面積を持ち、宇津野新田稲作生産組合長をしている島田さんのもとに、J Aや行政から「集落営農組織を立ち上げてはどうか」という誘いが来ないはずがない。独自型の稲作経営をする農家が比較的多いなかにあつて、島田さんは3人の農家とともに協同の育苗施設も運営している。J Aや行政の考える理想的な集落組織のリーダーとも言える。

実際のところ、J Aや行政から明確な誘いがあるわけではないが、「生産組合をスライドさせて集落営農組織を作ってはどうか」、「集落営農組織ができたら」リーダーとしてやってもらえないか」と持ち込まれるのは時間の問題だろう。

集落に背を向けては生きることはできない——これは、島田さんの信条である。

「水や道路を共同利用する土地利用型農業を続けていくためにも、家族が何代にもわたって豊かに暮らしていくためにも集落はなくてはならない」と話す。子供のころから、「集落では皆が協力していかなければならんよ」と徹底的にたたき込まれ、体の隅々にまで身に染み付いている。

そうした思いから、作れば作るだけ売れていく産地にあつても、転作には100%協力してきた。その一



▲島田さんをはじめ4人の生産者で使っている育苗施設。施設が完成したのは1985年。稼動するのは4月から6月上旬まで。



▶育苗施設では約9000枚の育苗箱を作っている。集落の農家から頼まれた苗も作っており、一枚880円で販売している。



▲60℃のお湯で8~10分殺菌する。島田さんは最近、(株)タイガーカワシマの「湯芽工房」を農業の使用量を減らす目的で導入した。主に地域の環境に配慮していることだが、償却が済めば農業代が減る分、コスト減にもなる。

経営的な配慮の欠如とJAの関与拡大

方で稲作所得基盤確保対策、担い手経営安定対策といった自らの拠出金を伴うような補てん制度にはいっさい参加してこなかった。地域の輪にかかわる部分は協力するが、周りに迷惑がかからない部分については、国の指示など受けたくない。今回、国から「集落」、「集落」と言われる以前から、島田さんを含む農業経営者の多くは「集落」と正面から向き合ってきたのだ。

ところが、品目横断経営安定対策の担い手として組み込まれた「集落」は、国の要件を満たさかどうかだけを重視したものであり、農業経営者が向き合ってきた「集落」とは異なる。本誌でも、個別経営者が集落管

農組織のリーダー役として請われていること、リーダーを引き受けてしまおうと、その経営者が集落を背負うことになり、最後には集落とともに共倒れしてしまうなどと警鐘を鳴らしているが、島田さんも「まったくそのとおりだ」と言う。

島田さんが、国の考えている集落組織に無理があると考える理由は大きく分けて二つある。

一つは経営面だ。今進められている集落組織は、経理の一元化、法人化計画の作成などの要件を満たせるかどうかだけが重視され、どんなコメを作り、どう売っていくかという方針や戦略云々はいっさい問われていない。つまり、農地を集約化するなどして規模を拡大してきた稲作経営者たちが最も力を入れてきた部分が見事に欠落している。「そんな集落管農がうまくいくわけがないと思うが、行き詰ったときの責任についてはいっさい触れられていない。おそらく行政もJAも責任をとらないだろう。結局、リーダーになった生産者が自分の土地を提供させられるなど、尻ぬぐいをさせられることになるのではないかと島田さんは読んでいる。

もう一つはJAが影響力を強めていくのではという懸念。補助金の受け皿となった集落組織には、JAが

関与を深めてくるのではないかと、うのが島田さん、そして島田さんと付き合っている資材業者たちの見方である。

島田さんは現在、コシヒカリ共和国としてのコメ以外はJAに出荷していない。しかし、彼の周辺では集落組織をつくった場合、資材の購入にしても、コメの販売にしても単協さらには全農を通じた販売に誘導されているのではないかとこの情報が伝わっているという。

島田さんらがそう考える理由の一つが、全農が05年秋に発表した「新生全農米穀事業改革」(全農ホームページに掲載)。このなかに、コメの全生産量のうちの、全農が取り扱うコメの数量、そのうち単協がスーパーや生協などに直売する数量が並んでグラフになっている。これを見ると、単協の直売数量は年々増える一方で、全農の取り扱い数量は減っている。02年産は37万t(JA全農の取り扱い数量は44.5万t)だったが、03年産は47万t(同35.1万t)、04年産は57万t(同43.2万t)と増えている。ところが08年産の計画では、単協の直売数量のグラフは記載されておらず、全農の取り扱い数量だけが55.3万tとある。見方によっては、単協の直売は廃止し、すべて全農に統合させるつもり

ずっと向き合ってきた「集落」とこれからも付き合っていく



◀ 05年産から新潟県産コシヒカリは、一斉にコシヒカリBLに切り替わった。BLとは、コシヒカリにもち病に抵抗性をもたせた品種を交配し、その子供にコシヒカリを何度も掛け合わせて(戻し交配)作った品種。産地、流通業者の間で賛否両論あるが、島田さんは「農業も減ったし、食味もむしろ良くなった」と評価している。



▶ コシヒカリ共和国のコメは有機認証をとっているが、自身で販売するコメは認証をとってはいない。栽培方法そのものより、「あなたが作ったコメだから食べたい」といってくれる人を大切にしたいし、そういう付き合いの方が長続きするのではと島田さんは考えている。消費者に販売する価格は5kgで4500円、10kgで7700円(いずれも送料、消費税込み)。

とも読み取れる。島田さんたちに出回っている情報もこういった解釈によるものだろう。さらには、集落営農組織が作るコメは、地代や小作料を除き、JAに納めなければならなくなるのでは? といった情報も流れているという。

ちなみに、全農米穀部に確認を試みたところ、「そういう意味ではありません」という答えが返ってきた。「08年産の単協直売分がどう推移するかわからないため記載していただけないだけであり、すべて全農を通してということではない。もちろん販売を全農に一本化したいという意向はあるが、あくまでも生産者の手取りが増える流通を選択するのが最優先」とは担当者の弁。

読者のみなさんはこの弁をどう捉えるだろうか? 「そうなのか。それならば安心だ」という捉え方もできるし、「そんなのはうそに決まっている。100%全農通しを狙っているに違いない」と捉える見方もある。もっとも避けたいのは、「安心だ」と胸を撫で下ろしたまま何もせず、後になって全農がなんらかのアクションを起こしたときに「だまされた」と憤慨することだろう。本誌の読者でJAグループに過度な期待をしている経営者はおられないだろうが、「だまされた」と言った時点

でゲームオーバー。JAをいたずらに敵対視することはないが、直販をしていこうというのであれば、農水省から業務改善命令まで受けた全農がどんな動きをしようとしているのか、あらかじめ知っておくのは最低限必要なことだろう。

自分の身は自分で守る以外にない

全農に資料について確認をとったのは、島田さんに会った後である。全農の回答を私は、島田さんに伝えていない。なぜなら島田さんに会った時、集落営農を巡る動きについて、すでに答えを出しているように思えたからだ。そして、回答を伝え聞いたところで揺らぐものではないだろうとも感じた。

「自己完結型でいきます」——島田さんは何度もこの言葉を繰り返した。集落営農組織立ち上げの圧力がかかろうとも、引き受けるつもりはない。しかし、自分が接してきた「集落」との付き合いはこれまでどおり変わらず続けていく。自己完結にはこうした意味が含まれているように聞こえた。

幸運にも島田さんの集落には7人の認定農業者がいる。このうち島田さんともう1人を除く5人はおもに集落内で経営規模を増やしている。「集落に1人しかいない場合は、『あ

ずっと向き合ってきた「集落」とこれからも付き合っていく

も、島田さんが稲作農家だということを知った乗客が、「コメを食べてみたい」と注文をしてくれるようになった。

また、お客さんがお客さんを紹介してくれるということも多い。固定客で、「この人たちに5kgずつ送ってください」と数人分のリストとともに注文をしてくれる人がいる。す



▲島田さんの長男の徳敏さんが大巻小学校に通っていたころ、PTAの役員をやったことがきっかけで稲作体験の指導を始め、20年間続いている。子供たちは田植え、稲刈り、はさがけなど一連の作業を体験する。島田さんは「食育ボランティア」としての活動が認められ昨年、新潟県から表彰された。「表彰されたのは、これ以外に消防関係ぐらい。子供たちからもらった感謝状が今まで一番嬉しかった」と語る。



ると今度は送られた人から注文が入る。

就農したころは、機械に乗るのが好きで自分が作業を終えた田んぼを眺めるのが「農業のおもしろい点」だと思っていたが、今ではお客さんとのやりとりが、「いちばんの喜び」だと微笑む。自己完結型の農業の原動力は、そこにあるのだろう。

国の政策よりも重いものは

魚沼コシのように高値で売れるコメ産地には補助金などいろいろなと島田さんは思っている。「そのかわり、国内自給率が低い作物については、集中的に補助金を出すべき。一方、担い手支援から漏れる地域については、自然環境を守っていくという視点から補助金は支給されるべき」。

島田さんは、こうした現場の意見が政策に反映されず、相変わらず全国一律の政策しかとうとしない国にいら立ちを感じている。ましてや、集落を守るといふ大義名分のもとに、生産者たちの努力が報われなくなるような仕組みが出来上がってしまったら、産地として発展はおろか、衰退していくばかりだという危機感を感じている。

取材の途中で、奥さんの由美子さ



青山浩子

【筆者プロフィール】
農業フリージャーナリスト。1963年愛知県岡崎市生まれ。86年に京都外国語大学英米語学科卒業。日本交通公社（JTB）勤務を経て、韓国延世大学に留学。帰国後、(株)船井総合研究所などに勤務。在職中、農業関連のコンサルティングに携わる。99年に独立。農業関連のフリージャーナリストとして活動中。著書に「農」が変える食ビジネス（日本経済新聞社）、「農産物のダイレクト販売」（共著、ベネッセ）がある。農業関連の月刊誌、新聞などに記事を連載する一方、茨城大学農学部非常勤講師、韓国農民新聞の客員記者も務める。

んがカレーライスをご馳走してくれた。ご飯はもちろん島田さんや奥さんが作ったものだ。私の財布ではとても買えない魚沼コシ。カレーの味は申し分なかったのだが、カレーライスにするのがもったいないほどおいしかった。「自分の作るコメが一番おいしいと思いますか？」と聞くと、「そんなことを思っていたら、今ごろ自滅して、消えているよ」と一蹴された。

島田さんのコメを注文するお客さんは、彼の作るコメの味、コメへの思いに共感しているからこそ注文し続けるのだと思う。

島田さんはこれからも自分の描く「集落」をしっかりと守っていくに違いない。接しているお客さんや、向き合っている集落が、国の政策よりもずっと重みを持っていると知っているからだ。